

# 外から見なおした「我々」 —海外在住ネパール人と「包摂」

文・写真  
名和克郎

共同研究 ● ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究（2011-2014）

## ネパールの政治情勢とその外部

西暦 2013 年 11 月 19 日、ネパールの制憲議会選挙が行われた。5 年半ぶりに行われたこの選挙の結果、1990 年以來の主要政党であるネパール・ कांग्रेसと共産党 UML がそれぞれ第 1 党、第 2 党となったがいずれも過半数には届かず、マオイストは大きく得票を減らし、2 政党に大きく水をあけられた第 3 党となった。保守系諸政党が議席を伸ばし、マデシ（ネパール平野部の人々）政党は議席を減らした。この選挙結果を基に、ネパールの政治は、新憲法制定に向けた、しかし実際の争点は新憲法の内容に限られない、長い交渉過程に再び入ることになるだろう。その過程で「包摂」の語がどの程度実質的な重要性を持つことになるのか、選挙結果を見る限り、予断を許さない情勢である。

他方、ネパールをめぐる状況は、ますますネパール国内だけを見ては理解出来ないものになりつつある。グローバルに流通する諸概念（本共同研究がキーワードとする「包摂」はその一つである）、それと密接に関係する国際機関や INGO との関係などに加え、本共同研究で繰り返し議論されてきたのは、ネパール国外に在住する数百万人のネパール人の重要性である。もとよりそのあり方は極めて多様であり、単純な一般化など出来ようはずもない。ここでは、まず私自身の最近の調査を元に状況の一例を具体的に示し、その後、研究会の議論を振り返りつつ、あり得る状況の幅を示したい。

## 「我々」、村、民族、国境

2013 年 9 月 18 日からほぼ 1 か月間にわたり、アメリカ、ニュージャージー州にあるコールドウェル・カレッジの一画で、写真家ブスパラージ・アイトワールによる写真展「En Rung Mung: We are Rung」が開催された。大学のホームカミングデーにあわせて 9 月 21 日に開催されたレセプションは、恩師や大学関係者、大学の同級生、同郷の友人知人、アート関係者などに加え、たまたま母校に戻ってきてこの催しを知った者に至るまで、入れ替わり訪ねてくる多くの人々で賑わっていた。

ブスパラージに会ったのは、ほぼ 18 年ぶりの筈である。彼は極西部ネパールの村チャングル出身で、1993 年には村の学校に通う小学生だった。より設備の整ったヒマラヤ南麓の小学校に子供を通わせようとする親が増えつつある中、富裕層に属する訳ではない彼の家族は、まずは村の学校を選択したのだった。その後彼は、成績優秀であったのであろう、カトマンドゥの有名高校に合格、さらに大学でアメリカに留学し、卒業後は母校でアシスタントをしながら写真の勉強を続けているとのことだった。

写真展のタイトルの前半は、「我々ラン達」を意味するジャンシー語（カタカナで書くと「イン・ランマン」が一番近い）

この部分は電子媒体による公開の許諾が得られていません

ブスパラージ・アイトワールの展覧会 En Rung Mung: We Are Rung にて（2013 年 9 月、アメリカ、ニュージャージー州）。

を、英語風にローマ字で書いたものである。展示された写真の半分ほどはポートレートで、残りは、村やその周囲の景観、人々の日常生活、儀礼の様子などを写したものだ。展示された個々の写真にタイトルや説明文は付されておらず、入り口近くに貼られたパネルの文章が、唯一の英語による説明であった。そこには、ランがネパールの北西端、インドとチベットとの国境地帯に住む牧畜商業民であること、3 つの地方にある村々に住んでおり、自分の村はそのうちビャンス地方にあること、冬には家畜を連れてヒマラヤ南麓に移動するため 2 つの家を持っていること、文字を持たずに自分達の文化を 21 世紀まで伝えてきたが、それが消滅の危機に瀕しつつあること、この展覧会が、自分の祖父母の写真を求めるといふ個人的な目的を出発点とし、それがランの生活の記録とい

う方向に展開していったことが、撮影された儀礼の簡単な説明や、将来の文化継承への希望とともに綴られていた。ここで「ラン」という名前が使われたことは重要である。この人々は従来「ビャンシー」「ボーティヤ」「ソウカ」といった様々な名前で呼ばれてきたが、「ラン」こそが、自分達自身の言語による名前だからである。

ポートレートの中には、私が20年前にお世話になった懐かしい人々に混じって、どこかでお会いしたことがあるような気がするものの、かくとは思い出せない長老達のものが含まれていた。プスパラージに聞いてみると、プディ村の人達だという。この村で12年に一度行われる大祭キルジェ・パーモ（この儀礼の写真も多く展示されていた）を撮りに行った際に撮影したものだという。説明文に明確に書かれてはいなかったが、ランはネパールとインドのウッタラーカンド州の双方に住んでおり、プディ村はインド領にある。そして、ランの村々は、複雑に絡みあった姻族関係のネットワークで結ばれているのだが、その関係の粗密にネパール・インド国境の存在は、現在に至るまでほとんど影響を与えていない。かくして、解説文に一瞬現れた国家は、実際の「我々」の提示においては、背景に退いたのである。

もう一つ興味深かったのは、ポートレートの中に、ネパールの他の地域から移住してきてこの地に定住した男性と、村の鍛冶屋の頭領のものが含まれていたことだった。彼らは共に、村の神や他の村人に認められたチャングル村の一員であるが、移住してきた男性がランであるかについては意見が分かれ、鍛冶屋については自他共にランでないことを認めている。ここで前景化するのは、姻族のネットワークによって擬似的に形成される「ラン」という枠組ではなく、人々が日常生活を送る「村」という単位である。鍛冶屋の頭領のポートレートが、彼が鍛えた村人達の刃物や農機具の写真と併せて展示されていたことは、示唆的である。写真家プスパラージ・アイトワールが、初めての写真展で「我々」を提示しようとする時依拠したのは、国家と民族境界とによって明確に切り取られたジャナジャーティ（「民族」）という単位ではなく、村での生活の前提となってきた、文脈により変動する柔軟性を持った「我々」のくくりであった。

### 多様な言説と経験

「包摂」という語は、しばしば包摂される単位の明確な設定を要請する。ジャナジャーティやダリットといった集団範疇との関係で用いられる場合には、とりわけそうである。実際、従来存在していた在地の緩やかな人の範疇化が、近年明確な境界を持った集団範疇へと変容しているという指摘は、ネパール研究において新しいものではない。プスパラージの写真展は、ネパール国内の急速な言説の変化に巻き込まれていないが故に、海外において従来の感覚が呼び起こされた事例とも考えられるが、これはむしろ一時的で例外的な事態かも知れない。彼が今後プロジェクトを進めていけば、インドやネパールのランの民族団体との交流はほぼ不可避であり、そうした交流においては、「包摂」関係のものを含め、言説の調整が要請される可能性が高いからだ。



チャングル村の学校の先生と生徒が、寄付を求めて村の家々を回っている。プスパラージの姿も見える（1993年9月）。

国外に在住するネパール人が自らを位置付ける枠組には、かなりの幅がある。例えば、日本在住のネパール人の多くが民族別の組織を作ってきたことはよく知られている。ケシャブ・ラル・マハラジャンは、研究会の中で、ネパールの主要政党がいずれも東京支部を持っていることを指摘した。また、上杉妙子が研究を進めている、在外ネパール人協会という組織化の形態もある。多重にネットワーク化された状況の中で、どのような枠組が相対的に力を持ち、様々な言説がどのように流通しネパール社会に還流するのか、今後も議論を続けていきたい。

同時に注意すべきは、全ての国外に住むネパール人が、こうした言説の政治に同じように参加している訳ではないことである。例えば、カタールやアラブ首長国連邦でネパール人男性労働者達の生活の場に寄り添った調査を元にした南真木人の発表では、問題の中心は直接的な言説の政治ではなく、より間接的な、出稼ぎが与える生活習慣や経済や社会に対する感覚の変化とそのネパール社会への影響であった。さらには、田中雅子が論じる人身売買サバイバーのように、基本的には特定の状況から抜け出した後に、当該状況の「当事者」として社会的包摂を求めていく、という過程も存在する。

人々を送り出す側に目を向けてみれば、渡辺和之が昨年度に行った報告のタイトル「村に残った人々の暮らしはどう変わったか？」が端的に示唆するように、多くのネパールの村の状況は、国内の都市から海外へと連なる人の動きを無視しては論じられないものとなっている。村を出た人々と村に残った人々の双方が、様々な度合いと形態で「包摂」概念とそれなりに関係するのであれば、本共同研究の課題は、現代ネパールの比較民族誌そのものへと近づいていくことになる。

「包摂」の語を通して現象を見ることで何かを見失うことがないように注意しつつ、最終年度の議論を進めていきたい。

### なわかつお

東京大学東洋文化研究所教授。専門は社会・文化人類学、ネパール及びヒマラヤ地域の民族誌。著書に『ネパール、ビャンスおよび周辺地域における儀礼と社会範疇に関する民族誌的研究—もう一つの〈近代〉の布置』（三元社 2002年）、共編著に『グローバリゼーションと〈生きる世界〉—生業からみた人類学的現在』（昭和三十二年）他。